

戦争の傷痕と悔恨：阿部知二の南方徴用体験から転 向問題を考える

蘇，冠維
九州大学地球社会統合科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7181942>

出版情報：九大日文．42，pp.19-34，2023-10-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



戦争の傷痕と悔恨

——阿部知二の南方徴用体験から転向問題を考える——

一、戦争への悔恨

蘇冠維

戦前から戦後にかけて、あらゆる勢力の争いに流されたり、巻き込まれたりしないように「自由主義」⁽¹⁾の立場をとってきた阿部知二は、「歴史のなかへ」(一九五五年六月)の中で、次のように深省している。

振りかえってみれば、戦争の前から長い間ずっと、私は人間と社会とについての傍観者であり、文学以外のことはほとんど考えず、政治のことなどには、まったく無知無関心の状態ですごしてきた。戦争には身の毛もよだつような恐怖と嫌悪を感じ、(しかも、それに対して抵抗もしないという罪をおかし、それゆえに)それは、私の二ヒリズムをつよめたにすぎない。(中略) こういう無責任な二ヒリズムと、それからくる頹廢の生活を、『自由』であると思ひこんでいた。⁽²⁾

戦争の暗闇に、「抵抗」せず傍観し続けてきた「罪」を、自己の戦争責任として突き詰める阿部のこの発言には、「戦時中

に、時局向きのことを自ら遮断し、いわば芸術至上主義青年であつた私の、一つの枠がそこで破れた(中略)枠と酔狂さがぶつかつたり目撃したりした事件や経験を通じて、次第に破れていったものである」⁽³⁾と語る堀田善衛の上海体験と似た趣がある。日中戦争末期の上海に滞在していた経験をもつこの二人の発言は、昭和十年代(一九三五～一九四五年)の政治闘争の渦の中で敢えて非政治的な立場を保ち、自ら混沌とした世相を遮断し、「酔狂」な知識人に対して必然的帰結とも言える精神的危機と理想の破滅を指摘したのである。

「歴史のなかへ」が書かれた時、阿部知二は姫路ですでに五年の「隠遁」⁽⁴⁾の年月(一九四五～一九五〇年)を経ており、「再生」⁽⁵⁾を果たしていた。敗戦直後の一九四五年十一月に、洪水に見舞われた故郷美作から姫路の隅に移り、そこで戦時中にジャワ、中国や日本とあちこち放浪した「愚かな自己の運命」を振り返り、抑えきれない苦渋を噛み締めながらエッセイ「漂浪の苦味」を綴った。「この数年のいはゆる文化人と稱するものは、互が互の加害者であり同時に被害者であり、わけのわからぬ混乱のなかで、複雑な痛手を背負ひこんでしまつたものらしく」、「せめて一人々々が、この數年間に於ける己の生活の中で、苦澁の正體を突きつめることをしなければならぬ(中略)文學もそこからはじめて芽を吹き出すのであらう」⁽⁶⁾と、文学の花を咲かせるために文学者は戦争によつて心に深い傷を負いながらも、それを突き詰めなければいけないのだと、阿部は知識人の戦争責任への反省を呼びかけていた。「漂浪の苦味」の文末に、「私

には、『田園荒れたり』と吟じて帰り耕すべき山ふところの故里も無い」、「それであつてみれば自分の心の中をこつこつと耕して、にがい思出を掘りおこしたり、自分の心の中を放浪し續けてさまざまな印象を反芻してみたりする他に仕事はない。その記録を少しづつ小説といふ形でかいてみようかと思つてゐる」⁽⁷⁾という一文がある。阿部は中国六朝時代の隱逸詩人陶淵明（三六五～四二七年）の姿を思い浮かべながら「田園荒れたり」（陶淵明「歸去來辭」の「田園將に蕪れんとす」から由來・稿者注を書いたのであらう。天分豊かな詩人の身でありながら仕官の道を軍人に求めた陶淵明は、過去四十年におよぶ人生を振り返り、「心にもなく軍閥の走狗（手先・稿者注）として官途についていたことを反省」し、自分の過去と、自分が生きていたその社会と時代との決別を告げるために、彼は辭職して残された人生を故郷の田園に埋めようと決心した⁽⁸⁾。その時に書かれたのが、以下の「歸去來辭」であつた。

歸去來兮

さあ、帰ることにしよう。

田園將に蕪れんとす

故郷の田園は荒れ果てようとしている。

胡ぞ歸らざる

どうして帰らずにいられよう。

既に自ら心を以て形の役と爲す

これまで、進んで我が心を肉体の奴隸としてきたのだ。

奚ぞ惆悵として獨り悲しむや

くよくよと独り悲しむことはもうやめよう。

已往の諫むまじきを悟り

過ぎ去つたことは今更取り戻せないが、

來者の追ふ可きを知る

これからのことはどうにでもなる。

實に途に迷ふこと其れ未だ遠からず

確かに我が人生における進路を踏み誤つたけれども、まだ

それほど深入りはしていない。

今の是にして昨の非なるを覚りぬ

（役人をやめた）今日の自分が正しくて、昨日までの自分は

間違つていたのだ。⁽⁹⁾（後略）（下線引用者、以下同様）

「漂浪の苦味」における阿部の切実な想いは、末尾の「田園荒れたり」の一言で表されているといえる。そこには、過去の悔いと良心の咎めがあつた。洪水で「耕すべき山ふところの故里」を失つた彼は、自分の心の中をこつこつと耕して、満ち溢れそうな漂浪の記憶を整理し作品化することを決意した。それ以降、阿部は姫路での五年の間、矢継ぎ早に「緑衣」（『新潮』、一九四六年一月）・「新浪人伝」（『週刊朝日』、一九四五年九月二三日～一九四六年二月二四日、後に「大河」と改題されて新潮社刊『大河』に収録される）・「陸軍宿舎」（『改造』、一九四六年三月）・「隣人」（『新潮』、一九四六年十二月）・「花影」（『文学界』、一九四九年六月）・「追憶」（『ニユーエイジ』、一九四九年六月）などの「上海もの」と、「死の花」（『世

界』(一九四六年七月)・「罪の日」(『朝日評論』、一九四七年一月)・「あらまんだ」(『人間』、一九四七年六月)・「猿」(『光』、一九四七年七月)などの「ジャワもの」を発表した。これら二つの作品群は、戦時中に発表された一連の国策文学的な作品⁽¹⁰⁾で萎れた阿部知二文学を「再生」させたのである。このジャワと上海での戦時中の外地体験を整理し、作品化するプロセスは、文学における「再生」の過程のみならず、自分の戦争責任を清算し、自己の在り方を問い直す人生の「再生」プロセスでもあることは言うまでもない。

文学と人生の二重の「再生」以来、すでに竹松良明による指摘があるように、「戦前の非行動的知識人の面影は、数年間の戦時下における遍歴の中におき忘れてきたかのような、知二の新時代開幕を告げ」⁽¹¹⁾たのである。歴史の「傍観者」として長く孤独に耐え忍んできた阿部は、過去の自分と断絶を図ろうとした。水上勲によれば、一九五二年に『血のメーデー事件』の特別弁護人として法廷において証言を行なったのをきっかけに、「阿部は「実にめざましい程の『左』への転換をとげていく」のであった。一九五三年の「日本文化人会議議長就任と、中国訪問」⁽¹²⁾、三十三年(一九五八年…稿者注)のソ連訪問⁽¹³⁾、翌年のわたつみの会⁽¹⁴⁾理事長就任、その間の松川事件⁽¹⁵⁾、教科書裁判⁽¹⁶⁾、A・A作家会議⁽¹⁷⁾等への関わり、そして晩年のベトナム反戦運動⁽¹⁸⁾、日本共産党への接近と、よりエスカレートしていったのは知られているとおりである」⁽¹⁹⁾。

しかし、こうした驚きの転身ぶりに批判は付きものである。

戦後に「便乗作家」⁽²⁰⁾という悪名を馳せ、また「まるで道に迷ったように左の道へ入り込む(中略)求道の心がいかに純粹で熾烈であろうと、道そのものが間違っている」⁽²¹⁾と、旧友の理解を得ることはできなかった。「文壇の常識から言えば、いい歳をしてという批判もあったかと思う。阿部知二はそれもよくわかっていた。だが、やむにやまれぬもの——それは、デーモンと呼ぶべきであろうが、それに素直に従って生きとおした」⁽²²⁾という荒正人による阿部の没後の評価どおり、たとえ文壇や親友に理解されなくても、彼はもはやあの戦前から「奇怪な分裂と困惑(中略)に陥入り(原文ママ…稿者注)ながら、文学に寄りすがっていた」⁽²³⁾精神的彷徨者ではなく、ただひたすら自らが選んだ道を自信と希望を持って歩むような人になった。

ここに、一つの疑問が浮かんでくる。なぜ昭和初期の左翼全盛時代に反対側に立った阿部が戦後左翼活動家としての人生を選んだのか。その理由として、阿部自身は「昭和二五年に(一九五〇年…稿者注、ヨーロッパにちよつと行くことがあった。そこでも、もちろん傍観者であった。しかし、そのことから、歴史というものの空気が、しらずしらずにしみ入りはじめた(中略)私が歴史に近づくか、歴史が私をとらえようとするか、ということがはじまったようである」⁽²⁴⁾と、ヨーロッパ旅行での目覚めに帰結した。阿部の息子である阿部良雄氏も同様に「日本あまりの貧しさにシヨックを受けヨーロッパから帰ってきて、これは社会主義にするより仕方ないと決意したのが本当です。その辺で例のメーデー事件や、そういうきつかけもあった」⁽²⁵⁾

と、豊かなヨーロッパから戻ってきた阿部は、貧窮する日本に一筋の活路を切り開くために社会主義への関心を持ち始めたのだと述べている。しかし、果たして本当の理由はそれだけなのか。

水上勲によると、「根本的な要因としては、やはり過去の戦争体験の反省を抜きにしては考えられない」⁽²⁶⁾とある。まさしくその通りで、阿部はエッセイ風の創作「十年」（一九五〇年）において、戦時中のジャワから上海への暗い漂流の中、自己の良心を裏切ったことで、心に深く刻まれ、永遠に消えることのない戦争による傷痕が残ってしまったことを以下のように記している。

戦争の間に、私は、卑屈、犬儒主義⁽²⁷⁾、投げやり、不真面目、心と口とは異なることも言い得る無恥無差の心——そのようなものを、身につけてしまっていた。戦争が終つたからといつても、それは、戦傷者の組織に残つた銃弾のように、私の心の組織の中に食い入つて残り、寒暑につけてその銃創が痛みを發するように、ときどきひりひりと私をいためつけた。その傷がいえるまでは、新しく仕事をはじめても無駄であらうと思つて、田舎にとどまつていたが、その傷はもはや生涯に残るものであるように思われてならなかった。むしろ戦後の東京にいち早く飛び出して⁽²⁸⁾、その目まぐるしさの中で、機械的に我を忘れるというのが、適切な健康法だろうとも感じられたが、私にはその勇氣すら

なかった。⁽²⁹⁾

以上の検討から明らかになつたように、阿部の「左」への歩みは、敗戦後荒涼とした焼け野原の日本を救うただけでなく、自己の戦争体験に対する人生を貫く反省であり、奥野健男が言つた「戦争期のファシズム、軍国主義の暴威は彼の心に深い傷を与えたのであらう。戦後の阿部知二は、政治思想に強い関心を持つ積極的な人となり、進歩的文化人として行動し、社会主義的傾向が強まる」⁽³⁰⁾のように、戦争の傷痕を癒すための選択でもあつたことが窺える。

では、阿部の人生と文学に決定的なものをもたらした「戦争の傷痕」とは何なのか。それを探るために、阿部知二の戦争体験について三部から成る小論（ジャワ徴用体験と二度の上海体験）を構想しているが、紙数の都合上、本稿はその序章として、阿部の苦い漂流の始まりとなるジャワ徴用の詳しい経緯と、それによつて刻みつけられた心の傷痕を探っていきたい。

まずはそれに至る前提として、阿部のジャワ徴用体験に関する研究の動向を明らかにすることから始めたい。このテーマについての研究は、これまで多くの蓄積があり、例えば、克明な現地調査に基づいた木村一信の著書『南方徴用作家——戦争と文学』⁽³¹⁾（一九六六年）と『南方徴用作家⑤ジャワ篇阿部知二（一・二）』⁽³²⁾（一九九六年）、そして「阿部知二とインドネシア体験」⁽³³⁾（一九九二年）をはじめとする数多くの論文がその一例である。そのほかに、木村氏の調査結果を踏まえた総括的な研究である

竹松良明の著書『阿部知二・道は晴れてあり』⁽³⁴⁾と水上勲の著書『阿部知二研究』⁽³⁵⁾がある。さらに、南方徴用作家として阿部の行動及び移動の記録を摘記した竹松氏の「阿部知二——南方徴用作家研究・ジャワ編(1・2)」⁽³⁶⁾や、阿部の南方徴用体験を通して戦争を鼓舞する意図が含まれる児童読物である「敵のうしろ」を再考する和田典子「阿部知二 ジャワ戦争体験と文学——『敵のうしろへ』を軸に」⁽³⁷⁾などがある。これらの研究成果は多岐にわたるが、阿部の戦争体験(ジャワ徴用と二度の上海体験)をもとに転向問題に取り組む研究はまだ現れていないのが現状である。そこで、本稿は以上で挙げた先行研究を踏まえながら、まずは南方徴用の歴史について確認作業を行い、次に、阿部の戦争体験の始まりとなるジャワ徴用の詳しい経緯と、彼が携わってきた「文化工作」の実態、さらに自発的な取り組みである敵性学者の救助問題を明らかにしていきたいと考える。

二、「南進」政策と文化人の強制動員

太平洋戦争開戦(一九四一年十二月八日)を控えた一九四一年十一月、文学者、画家、音楽家、映画人、ジャーナリスト等を含む幅広い文化人のもとに、徴用令書の白紙が届いた。混乱した状況のなか、詳しい事情もわからぬまま、彼らは陸海軍の報道班員として南方(マレー方面、ビルマ方面、ジャワ・ボルネオ方面、フィリピン方面、海軍関係)へ強制徴用された。

文化人を慌てさせた「白紙徴用騒動」⁽³⁸⁾という重大な事態の背後には、大日本帝国の外地に対する軍事戦略の変更があった。一九四〇年七月第二次近衛内閣の組閣にあたり、従来の戦略方針である「南守北進」⁽³⁹⁾が急遽「北守南進」(武力南進)へと変わった⁽⁴⁰⁾。

中国大陸での戦争が泥沼化する日本軍は、日中戦争の早期決着を妨害しているものが欧米による中国支援(蒋介石支援)であると想定していた。「自衛」を図るため、日本は連合国⁽⁴¹⁾の援蒋ルート(仏印・ビルマなどを経由する路線)を遮断し、その局面を開きようとした。しかし、「南進」といえども「仏印」⁽⁴²⁾の確保は、確かに安全保障上の要請から生じたものではあるが、「蘭印」⁽⁴³⁾の場合は、それとは違い石油などの重要資源を獲得するための「自存」であつたと言つて良い。いずれにせよ、「東亜新秩序建設」、「大東亜共栄圏建設」、「自存自衛」、「満州が北の生命線、インドネシアは南の生命線」といったスローガンを掲げ、日本は武力南進を国策とし、日独伊三国軍事同盟(一九四〇年九月二七日)を締結した。同年9月からは、北部仏印進駐(一九四〇年九月)、南部仏印進駐(一九四一年七月)など武力南進政策が強行され、米英との関係は決定的な対立状態に陥つた。このことが引き金となつて、後に日本を太平洋戦争へと導いたのである⁽⁴⁴⁾。

「日本は(中略)武力南進し、さらに米英とのアジア・太平洋戦争という無謀な道へと突き進んだのである。物量に乏しい日本は、国民の精神力の動員を徹底的に追求し、思想戦・宣伝戦

に頼るしかなかった」⁽⁴⁵⁾と五味智英が指摘した通り、いくら「武力南進」といえども、連合国と対抗するには武力に頼るだけでは物足りないのである。日中戦争初期の「ペン部隊」の前列（一九三八年）を踏まえながら、それと共に、ヨーロッパにおけるドイツ軍の圧倒的な優勢を背景に、その戦勝を過信した日本は、ナチス・ドイツのP・K・W制度を真似し、一九四一年十一月に「国民徴用令」（一九三九年七月十五日から発動施行）を文化人に適用させ、第一次の召集⁽⁴⁹⁾を強行したのである。ドイツのP・K・W制度と日本の強制動員との関係について、座談会「戦争と作家」（『文藝』一九四三年一月、出席者：谷萩那華雄、阿部知二、尾崎士郎、神保光太郎、加藤重雄、神山潤）における陸軍報道部長・谷萩那華雄の証言があった。

大東亞戦争になりましたから執りましたこの徴備制度といふのは、まづドイツのP・K即ち Propaganda-Kompaniender Wehrmacht（国防軍宣傳中隊）の真似をした、といつても差支へありません。ですから、ドイツが宣傳報道のためにあらゆる文藝家、技術者を動員して、それを軍隊の一部に編入をして、活動せしめたといふこの遣い方を汲取つてやってみたんです。従つて日本の特殊性、それから大東亞戦争の特異なる場面といふことは、あまり考慮に入れずにそのまゝ真似してしまつたといふ嫌ひがあります。⁽⁵⁰⁾

以上の検討から明らかとなつたように、南進政策の遂行と戦

争体制の強化をはかるため、日本はあらゆる人力、物力、財力を武力戦、経済戦だけでなく、宣伝戦、思想戦など、全局的に集中して動員するようになったのである。それでは以下において、これら東南アジア占領地入りした文人たちがどのように戦争に協力したかについても触れておきたい。

五味氏によると、「これら文化人・知識人の南方徴用は南進政策促進のためであり、現地住民への宣撫活動のほか、作品を通じて銃後（戦場の後方や一般庶民の意味…稿者注）への戦意高揚、南進政策の宣伝でもあつた」⁽⁵¹⁾という。『南方徴用作家・戦争と文学』において神谷忠孝は、五味と同じことを一層明確な形で主張している。神谷氏によれば、文化工作は大きく三つに分けられ、第一は「対占領地宣伝」といい、日本語の普及が中心である。第二は「対軍隊宣伝」であり、「日本の軍人を対象とし、戦意高揚と聖戦思想の普及が目的である」。第三は「対敵宣伝」であり、対敵放送を中心に展開されているという⁽⁵²⁾。あらゆる文化力を動員し、敵と味方の生活のあらゆる側面に浸透していく任務をこれら文化人に課せられたことが窺える。

以上、一九四一年十一月に文化人の強制動員に至る経緯と、文化人が果たした役割についての概要を示した。このような時代の文脈に沿って、南方に強制徴用された作家の一人でもある阿部がどのように戦争と関わっていったのか、またどのような抵抗をしていたのかを探り、彼の心に刻まれた深い傷痕を以下で探ってみた。

三、阿部知二のジャワ徴用と文化工作

最晩年に阿部は、著書『良心的兵役拒否の思想』（一九六九年）を取り上げて、「個人がいくら平和への意志を持ったとしても、それだけではどうにもならない、これは困難な理想に過ぎないのかもしれない（中略）ところが進むにつれて逆に樂觀的になって来ました。これはいばらの道ではあるけれど、（中略）人間が戦争のない世の中を作ろうという歩みは、とぼとぼではあるが進んでいる」（『著者と二時間』『朝日新聞』、一九七二年八月十八日）と希望を込めて自身が思い描く未来を語った。しかし、「日本は軍事国家となり、太平洋戦争に突入していった。私は良心に基づく抵抗をすることもなく、多少逃避的な態度をとるのみで、その戦争のあいだをすごしたことを恥じなければならぬ」という一文からわかるのは、西洋の平和思想の発生と発展の歴史を辿り、太平洋戦争以降の日本を振り返るといふこの『良心的兵役拒否の思想』を著す時に、彼はきつと明るい未来を展望しつつも、人生で最も暗かった漂浪の日々に絶えず意識し続け、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願っていたのである。では、阿部の苦しい漂浪の始まりであるジャワ徴用の詳しい経緯は如何なるものなのか、そして、戦争に関わらざるをえない状況下で、彼がどのような仕事に携わり国策に協力していたのか、またどのような抵抗をしていたのかについて、以下で詳細に検証していこう。

徴用令書（出頭者注意書）が送り付けられたのは、一九四一年

十一月十五日⁽⁵⁴⁾前後で、「その時私の中には、何か軍關係の翻訳仕事でもさせるのか、という甘い想像と、ルーデンドルフ總力戰⁽⁵⁵⁾の思想の連想から、もしかすると北海道の炭坑にでも、われわれインテリを送りこむのかも知れぬ、という暗い疑念とが、こもこも入り乱れた」とあるが、総力戦と無関係ではないことを意識しつつも、その時の阿部はとりとめのない想像の中で言い知れない不安の影に包まれ、「インテリ受難の凶兆を漠然と感じていた」⁽⁵⁷⁾のである。

次女道子の誕生（一九四一年十一月二七日）を待たずに、阿部は急いで陸軍報道班員として麻布第三連隊に入隊した（一九四一年十一月三日或いは二四日）⁽⁵⁸⁾。約一ヶ月の軍事訓練を経て、一九四二年一月二日に、阿部はジャワ派遣軍の宣伝班員として、大宅壮一・北原武夫・武田麟太郎・浅野晃・横山隆一らと共にジャワ（当時の蘭印、現在のインドネシア）のパンタム湾に向かつて出発した。

三月一日夜半、敵前上陸作戦（バタビア沖海戦）で大宅らと乗っていた輸送船は撃沈し、重油の浮く夜の海を漂い、命を落とす寸前で救出された。その体験は、一九四二年三月二三日妻澄子あての便りに生々しく書かれていた。

バタビアにて内地からこゝ（バタビア）への途中は相当な難行苦行でしたし、上陸はあるひは御存じかもしれませんが激戦の真中で行はれたのでした。自分でもよく生き抜いて来たとおもひます。これも詳しいことは控えますが、陸

から何哩かの海中に飛びこんで闇と豪雨の中を泳いだりしました。おかげで身に一物も残らず爪哇の島に着いたときはまったくの裸ン坊でした。いろいろ準備した重い荷物大濱さんからお借りしたもののみんな有りません。

それからこのバタビアまで途中一睡もなく一昼夜トラックから降りたり押したりしながら進むといふやうなこともありました。それでも体は参りませんでした。ジャバは、思つたに勝るいゝところです。景色もよく気候も日本の夏より凌ぎいゝと思ひます。

バタビアに入つてしばらくは忙しくて落着けず、又、バンドンとか内地の方に派遣されたりしましたが、この頃やゝ落着きました。⁽⁵⁹⁾

一見、自分の安否や現況を知らせる手紙に過ぎないが、「体は参りませんでした」とあり、遠い日本にいる家族を不安にさせない心遣いが十分感じられる。「阿部知二・ジャワ・バリ関連略譜」によると、冷たい海での漂流や連日の行軍で疲労が極限に達した阿部は、バンドンに入つてから（一九四二年三月十四日）発熱が半月も続いたという⁽⁶⁰⁾。妻へ手紙を書いた時も、熱はまだ下がついていなかったのである。

病のおかげと言えるかもしれないが、他の報道班員が「民衆の指導、新聞、放送、日本語教育などとみなが炎熱の中で駆けまはつてゐた」⁽⁶¹⁾中、体を壊した阿部は、本抛地のバタビア（現在のジャカルタ）で最初の仕事である敵性図書や文化機関の調査

（オランダ学者の研究成果や研究所などの調査）に従事することができた。「幾軒かの本屋、貸本屋、図書館、またそここの個人の蔵書、役所の図書などの中から、日本に有用なものを探し、また敵性に渉るものを没収したりする」⁽⁶²⁾という仕事柄、彼はジャワの文化を探索し、理解を深める機会を持つことが可能になったのである。陸軍報道班員として報告文を書き続ける一方、数ヶ月にわたる仕事の中で、次第に「原始アニミズム」（精霊信仰）・「回教信仰」・「消滅した古文化」など、ジャワの現状や伝統文化、民俗信仰に心惹かれるようになった⁽⁶³⁾。

一九四二年五月中旬から約一ヶ月間、阿部は画家の小野佐世男、漫談家の松井翠声とともに、ジャワ全島とバリ島へ旅立つた。その時の体験と感想を詳しく記録している「バリ島の記」によれば、「機會をもとめて仲間といつしよに行つたのは、占領後二月（二ヶ月…稿者注）あまりといふ頃だった。まだ戦塵の中にあるといふ感銘も強かつたし、それに私はその八日間をほとんど病人の状態で過したのだから、もとより逸楽の島の観光者放浪者といふのどかな気分ではなかつた」⁽⁶⁴⁾と述べているように、炎熱の中で無理に駆け回つていたせいか、バリ島にいた頃から四十度近い熱が連日続いた。しかし、それでも収穫は大きかつた。ジャワとバリ島の各地を訪れ、さまざまな人と接触し、見聞を広めていく中で、土着信仰や古い文化への関心が「ジャワやバリの文化を育み、支え、守ってきた博物館、研究施設、さらにその担い手としての研究者たちへの関心」⁽⁶⁵⁾として一氣に目覚めたのである。このことは後に触れるように、オランダ

学者の救助問題と繋がる。

ジャワ・バリ島への旅から戻ってきてまもなく胸部疾患を患った阿部は、八月から十月にかけて約二カ月間病床生活が続いた。八月十一日ごろから北原武夫と一緒に西部ジャワのスカプミの山荘で病氣療養をしていたが、「文人電波対談」（八月二〇日に行った菊池寛などのラジオ対談）⁽⁶⁶⁾と呼ばれる内地向けの宣伝放送のため十七日にバタビアへ戻った。この仕事を終えた翌日、阿部は東部ジャワのセレクタホテルへ赴き、そこで再び一カ月余りの療養生活を送った（八月二日～十月九日頃）のであるが、「南・の自然の美しさと戦争のいとわしきとは、心を亂した」⁽⁶⁷⁾と「年譜」に淡々と書かれていたこの一文から、彼の心が数え切れないほどの苦しみと矛盾で揺られていたことが窺える。草花が咲き乱れているジャワの風景というものが、戦争の中でどんなに目に染み入るものであったのかという鬱屈な気分が、この短い文章の隅々から溢れてくる。療養生活を終えた後、しばらくしてジャカルタの放送局において、オーストラリアや印度目当ての英語放送といった対敵放送の仕事に携わったが、一年間の任期を終えて十二月下旬に帰国した。

以上の事例から、阿部は報道班員として、敵性図書や文化機関の調査、国内放送と対敵放送の仕事に従事しており、ある程度戦争協力の側面があつたことが明らかになった。しかし、彼は同時に「戦争協力者」とは異なる側面も併せ持っていた。以下では、彼が自発的に取り組んだ仕事、そして最も情熱を傾けた仕事である、日本軍に拘束されたオランダ学者の救助問題に

焦点を当ててみることにする。

四、敵性学者の救助

前述したように、陸軍報道班員としての阿部は報告文を書き続ける一方、敵性図書や文化機関の調査、そして内地向けの宣伝放送、対敵宣伝放送の仕事に携わってきた。しかし、彼は宣伝班員であると同時に、一人の学者でもあった。具体的な時期はまだに明らかにされていないが、おそらく阿部と北原武夫が西部ジャワのスカプミの山荘へ療養しにいく前のことであろう。⁽⁶⁸⁾オランダ学者の研究への情熱と悲慘な現状に胸を揺さぶられた二人は、政治的な立場の違いを超えて敵性学者の救出に奔走し始めた。ジャワ宣伝部隊の隊長であつた町田敬二中佐の著書『戦う文化部隊』によれば、阿部自身が語った以下のような思い出話に、彼らがなぜ敵性学者の救助に奔走し始めたのか、そしてその取り組みがどのように進展していったのかについて窺い知ることができる。

さてあの頃、戦争中だというのに、オランダ人の学者が数十人、どこからも給与を受けず、それぞれの分野で働いていました。例えば西部では、世界でただ一ヶ所残った「ジャワ犀」の天然保護区域に、自弁で餌をやりに行っていた学者もありました。またメラピの山が噴火の恐れがあるといて、ヘルメットをかぶって登り、住民たちに立退き先

きを指導していた学者もあつたようです。また中部ジャワの仏蹟の修理は、途中で一日手を抜いたらとり返しのつかないことになるというて、手弁当で番をしに行った学者もあつたということでした。

すべてこういう者が、三、四十人も居ることが判りましたが、それが次々に収容・監視され、終いには、殆んどいなくなりました。一日、私（阿部…稿者注）は北原武夫君と同道して、今村軍司令官にお目にかかり、監禁された学者のリストをお見せしたところ「学術研究のため文化財の保護は必要である。戦争の仕方にも新しい精神の誕生があつていい。注意しておこう」と言われました。それかあらぬか、その後、あちこちでそうした学者に対し心ある扱いがなされたと聞いております。⁽⁶⁹⁾

戦争の中で艱難辛苦を嘗め尽くし、それでもたゆまず研究に励んでいたオランダ学者たちが収容所に次々と監禁されていく様子に深く心を痛めた阿部は、北原と共に今村均軍司令官に向かって、敵性学者の保護問題を訴えた。その結果、「あちこちでそうした学者に対し心ある扱いがなされた」との記述から、彼らの懇願がようやく軍首脳部に届いたことが窺える。しかしながら、そうした彼らの動きに対する嘲笑の声もあがつた。寒川光太郎の『従軍風土記』では、東部ジャワのセレクトホテルで療養中の阿部との対話が記されており、そこからは、周囲の無理解に直面しながらもオランダ学者の救助に専念する阿部の

姿が浮かび上がってくる。

阿部知二氏が出て来た。思ったより元氣なので何よりの思ひである。いろ／＼とジャワでの任務の事などを語り合つた（中略 彼のバタビヤに於けるある文化工作の業績は、知る人ぞ知る。鼻先で笑ふ人の多い中に、重く腰を据ゑる側の人であるといふ感じを受ける）。⁽⁷⁰⁾

実際のところ、太平洋戦争勃発以降の阿部は、「阿部知二…戦争謳歌で浮かれ狂う便乗作家」に描かれている通り、「軍部の戦争政策に追隨し、支那大陸や南方の島島を歩いているいろいろ書いていた。（中略）後で示すように大変な戦争美化をやつていた」⁽⁷¹⁾人で、ジャワ徴用期間中には数多くの国策的な報道文やエッセイを書き、帰国後には日本文学報国会によつて上海に派遣され、中国の大学生と一般民衆に向けて、南方徴用での見聞を道具に大東亜共栄圏の正当性を鼓吹していた。さらには、湖南常德殲滅作戦にも参戦し、戦意高揚を図るエッセイを幾つか執筆したのである。しかし、そうした「戦争への協力」は、ただ一つの側面に過ぎない。阿部の報道班員としての姿に詳しい元宣伝班課長の清水斉は、一九九一年一月九日付の「木村一信宛書簡」において、彼のもう一つの側面を次のように書き綴つていた。

阿部知二、北原武男^マ氏等は町田宣伝部長^マと共に行動し、一

番早く帰国しましたのでその実績と本據は判明しませんが、相当戦争には非協力的な方々でしたし真面目ではありませんが否定論者としてよく私の事務所(宣伝課)に見えられては舌(毒舌：稿者注)をはいてゐた事を覚えてゐます。(ルビは原文ママ)⁽⁷²⁾

戦時中の阿部は「戦争の協力者」である一方、「非協力的」な側面も持っていた。本来共存するはずのない両者が、戦争という厳しい現実下で初めて共存が可能となつたのである。この相反する二つの側面を理解することは、彼の心に深く刻みつけられた「戦争の傷痕」と、戦後の転向の問題を解明する鍵となるであろう。

以上のように、阿部はジャワ滞在中に数多くの国策的な報道文やエッセイを執筆し、上海派遣期間中には大東亜共栄圏を宣伝し、湖南常德殲滅作戦にも参加したなど、「戦争協力者」と呼ばれても仕方のないような一面が存在していたことは事実である。しかし、彼は同時にそれとは異なる側面も併せ持っていた。それは、敵性学者の救助と、日本占領下の上海で反日的性格の強いセントジョンス大学で教鞭を執る(一九四四・一九四五年)ことであつた。取るに足りない抵抗かもしれないが、個人ではどうにもならない時代に、家族を養うという重荷を背負っていた阿部にとっては精一杯だったのであろう。そのような時代であるからこそ、人道的な理想がどれほど無力で儂いものなのかを、阿部は身に沁みて実感したのである。そうした絶望的で葛

藤に苦しむ姿は、『死の花』をはじめとしたいくつかのジャワものだけでなく、「わたしの三十年は——」ことにこの数年は、かういふ仕事ばかりなのだよ。君、これは徒労かね」と、日本軍に監禁された抗日学生の母親を救うため奔走していた『緑衣』(上海もの)の登場人物である伴野先生の自己懷疑にも遺憾なく投影されていた。こうした戦時中における個人の非力さと心の葛藤を、ジャワもの、そして上海もので繰り返し反芻していた背景には、太平洋戦争勃発以降、戦争への妥協や自己への厭悪と悔恨があつたためではなからうか。

戦時中、自らの良心を裏切つたことにより生じた深い悔恨が、彼の心に深い傷を残していた。それゆえ、戦後になって、「戦争の傷痕」を抱えながらも、積極的に平和を求める左翼的な社会運動に後半生を捧げた。左への転向も、過去の過ちへの罪滅ぼしであり、後世の人々が平和に暮らすための積極的な取り組みであると考えられる。

五、おわりに

昭和初期左翼が全盛の時代において、その反対側に立つた阿部は戦後、姫路での五年間の隠遁生活を経て、左翼活動家として驚きの転向を果たした。このことは、後の阿部知二研究において常に問題視されながらも、解明されていない課題となつた。水上氏の指摘によれば、転向問題は阿部の戦争体験と密接に関連している。しかし、阿部のジャワ徴用と二度の上海体験をも

とに転向問題に取り組む研究はまだその途上にある。

そこで、本稿は阿部の戦争体験について、三部から成る小論のうち序章にあたる部分で、太平洋戦争開戦とともに始まった、苦い漂流の発端でもあるジャワ徴用の詳細な経緯を明らかにし、さらに彼が携わった「文化工作」の実態や自発的な取り組みである敵性学者の救助問題に焦点を当て、彼の心に刻まれた傷痕を探る試みを行った。

ジャワ徴用中、阿部は軍部や国家の命令に従い、数多くの戦争を美化するエッセイを執筆した。これらは戦争協力の証拠である。しかしながら、戦争への協力と同時に、彼は敵性学者の救助という戦争に対する個人的な抵抗も行った。「協力」と「非協力」で引き裂かれる心と、戦時中に受けた悔恨の情、そして個人の非力さへの絶望感は、戦後において彼が著した「ジャワもの」と「上海もの」にも反映されている。阿部の転向は、自らの戦争の傷痕と向き合いながらも、過去の自分とは異なり、個人の力で反戦と平和を求める試みであったと言える。

【注記】

- 1 矢崎彰「現代文学にとつての15年戦争（9）自由主義者の天皇制認識と知識人の苦悩——阿部知二『日月の窓』をめぐって」『社会文学』、一九九七年六月、一三六頁を参考
- 2 阿部知二「歴史のなかへ」『阿部知二全集』（第12巻）、河出書房新社、一九七五年、一一一頁。
- 3 堀田善衛「上海にて」『堀田善衛全集』（第9巻）、筑摩書房、一九九四

年、一七五頁。

- 4 姫路文学館編『抒情と行動：昭和の作家 阿部知二』（姫路文学館、一九九三年、四八頁）では、姫路での五年間を「隠遁の季節」と称している。
- 5 竹松良明『阿部知二・道は晴れてあり』（神戸新聞総合出版センター、一九九三年、一七三頁）において、「昭和二十年十一月に姫路に戻り、二十五年八月までの約五年間が、（中略）自己の文学の再生のために費やされている」ことが指摘された。そのために、阿部知二にとつて姫路での五年間は、「再生」の五年でもあると言える。
- 6 阿部知二「漂浪の苦味」『東西』（第1巻2号）、一九四六年、四九・五〇頁。
- 7 同上、五〇頁。
- 8 石田公道「帰去来の辞について」『北海道教育大学紀要第一部・人文科学編』22（1）、一九七一年、六く七頁を参考。
- 9 現代語訳は、小尾郊一『全釈漢文大系31・文選（文章編）六』集英社、一九七六年、二五〇く二五一頁を参考。
- 10 阿部知二が日中戦争下に発表された一連の国策的色彩の強い作品について、水上勲「事変下の文学的抵抗について」（『阿部知二研究』、双文社出版、一九九五年、二九二く三〇五頁）で詳しく論じられている。
- 11 前掲『阿部知二・道は晴れてあり』、一七三頁。
- 12 一九五四年五月、中国の国慶節の招きで学術文化示唆団として出発、北京・上海・香港を訪問。
- 13 一九五八年四月、ソビエト作家同盟の招きで文芸家協会の代表として高見順・青野季吉と共にソ連を訪問、六月に帰国。
- 14 わだつみ会とは、一九五〇年四月二二日に結成した「日本戦没学生記念

会」であり、「再び戦争の悲劇を繰り返さないため、戦没学生を記念することを契機とし、戦争を体験した世代とその体験をもたない世代の交流、協力を通して戦争責任を問いつけ、平和に寄与することを目的」としている。

15 松川事件…一九四九年八月十七日、東北本線松川駅付近で列車が転覆し、機関車乗務員三人が死亡した事件。人為的な鉄道線路破壊が原因であった。最初の逮捕者を含め国鉄側十人、東芝側十人、計二十人を起訴した。その大半は共産党員であった。裁判では、自白者も含め全被告が犯行を否認し、この自白の信憑性、取調べの際に拷問、強制があったか否かが最大の問題となった。被告や家族の無罪の訴えに、作家の広津和郎、志賀直哉、吉川英治、川端康成、宇野浩二をはじめ国民的な支援が広がった。一九六一年、仙台高等裁判所は全員無罪判決を下した。

16 教科書裁判：一九六五年、高校日本史教科書の執筆者である家永三郎が、文部省による教科書検定は憲法の禁じる検閲にあたり違憲であるとして、国を相手に提訴した裁判。

17 A・A作家会議：アジア・アフリカ作家会議の略称。インド人作家たちの呼びかけで一九五六年十二月インドのニュー・デリーで開かれたアジア作家会議（参加十七か国。日本代表団長堀田善衛）がその始まりで、アジア、アフリカ両大陸連帯の必要性を背景に、一九五八年十月第一回会議（三七か国。団長伊藤整）がウズベキスタン共和国のタシケントで開かれ、「タシケント精神」（反帝国主義、反植民地主義）を確認した。日米安保条約反対運動を背景に一九六一年三月、緊急大会（二十か国。団長石川達三）を東京で開催。阿部知二「A作家会議の成果（胸うつ現地の息吹き―その人々の声をかそう―反省と自覚のために）」

（『朝日新聞』一九六一年四月二日）によると、阿部は一九六一年三月の緊急大会に参加したことがわかる。

18 ベトナム反戦運動：ベトナム戦争が激化するとともに、これに反対して世界各国に繰り広げられた反戦・平和の広範な市民運動。

19 水上勲「阿部知二における《戦後》――『抒情と表現』から『現代の文学』」「同志社国文学」、一九九四年、二六〇頁。

20 「阿部知二戦争謳歌で浮かれ狂う便乗作家」（全貌社全貌編集部編『進歩的文化人学者先生戦前戦後言質集』全貌社、一九五七年、九七―一〇二頁）において、戦時中の阿部知二を「大変戦争美化をやっていた」と見做し、「オポチュニストの言動から真の平和は生まれてこないのである」という手厳しい指摘もあった。

21 今日出海「二人の求道者」「迷う人迷えぬ人」、新潮社、一九六三年、一八八頁。

22 荒正人「激動期に学んだ文学者――阿部知二の生と作品（思想と潮流）」「朝日ジャーナル」（第15巻20号）、一九七三年五月、六一頁。

23 阿部知二「解説」「阿部知二作品集」（第一巻）、河出書房、一九五二年、二七四頁。

24 前掲「歴史のなかへ」、一一一頁。

25 阿部良雄「父と昭和文学」「昭和文学研究」（第21集）、一九九〇年七月、七〇頁。

26 前掲「阿部知二における《戦後》――『抒情と表現』から『現代の文学』」、二六一頁。

27 犬儒主義：有徳な生活を理想とし、社会的慣習に束縛されない自由を志した、キニニコス派の学説。また、一般に、冷笑的な態度をとること。

28 「十年」はエッセイ風の小説ではあるが、今日出海によると、戦後「阿

部は郷里の姫路に疎開したまま、出てくる様子もない。出版の自由が甦ったばかりか、出版景気すら起こっているのに、阿部は依然上京する気配も示さなかった」(前掲「二人の求道者」、一八四頁)。東京に行く勇氣すらなかったと語ったこの段落は阿部の実体験と二重写しにしたものであることが判断できる。

29 阿部知二「十年」『世界』(第53号)、一九五〇年五月、一三八頁。

30 奥野健男『奥野健男作家論集』(第3巻)、泰流社、一九七七年九月、三〇〇頁。

31 神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家——戦争と文学』、世界思想社、一九九六年。

32 木村一信『南方徴用作家⑤ジャワ篇阿部知二(一・二)』龍溪書舎、一九九六年。

33 木村一信「阿部知二とインドネシア体験(一)……その事実を巡って」『立命館言語文化研究』3(3)、一九九二年。

34 竹松良明「阿部知二・道は晴れてあり」神戸新聞総合出版センター、一九九三年。

35 水上勲「事変下の文学的抵抗について」『阿部知二研究』、双文社出版、一九九五年。

36 竹松良明「阿部知二——南方徴用作家研究・ジャワ編(1・2)」(『大阪学院大学通信』(第51巻4と5号)、二〇二〇年。

37 和田典子「阿部知二ジャワ戦争体験と文学——『敵のうしろへ』を軸に」『阿部知二研究』(第23号)、二〇一六年。

38 「白紙徴用騒動」という呼び方は桜本富雄『日本文学報国会——大東亜戦

争下の文学者たち』(青木書店、一九九五年、五一頁)による。

39 「北進論」と称される政策の登場について、外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『日本外交史辞典』(山川出版社、一九九二年、九二八頁)によれば、「中国東北部ならびに朝鮮に扶植した利権の擁護拡張を説いた一九〇七年の『帝国国防方針』がその基礎となつている」とある。

40 「南進」に関する呼び方は、竹松良明「阿部知二論——(主知)の光芒」(双文社出版、二〇〇六年、一九六頁)と、五味智英「アジア・太平洋戦争期の情報統制・宣伝政策、情報局のラジオ・プロパガンダ戦略と日本放送協会」『文学研究論集』(56)、二〇二一年、七五頁を参考

41 連合国とは、枢軸国(ドイツ、イタリア、日本など)と敵対した国家連合であり、具体的にはアメリカ、ソビエト連邦、中華民国、イギリス、フランスなど二六カ国が該当する。

42 仏印とは、「フランス領インドシナ」の略称であり、現在のベトナム・カンボジア・ラオスにあたる地域である。

43 蘭印とは、「蘭領インド」の略称であり、現在のインドネシアにあたる。

44 前掲「アジア・太平洋戦争期の情報統制・宣伝政策、情報局のラジオ・プロパガンダ戦略と日本放送協会」(八二頁)と、後藤乾一「アジア太平洋戦争と東南アジア」(『外交史料館報』(第27号)、二〇一三年、五頁)を参考

45 前掲「アジア・太平洋戦争期の情報統制・宣伝政策、情報局のラジオ・プロパガンダ戦略と日本放送協会」、八六頁。

46 木村一信「南方徴用作家の言説——〈ジャワ〉を中心として」『日本研究』(15号)、五六頁を参考。

- 47 ポーランドに侵攻した（一九三九年九月）ことで第二次世界大戦を引き起こしたナチス・ドイツは一ヶ月のうちに、ヨーロッパ最大の陸軍国であったフランスを壊滅した（一九四〇年五月〜六月）。
- 48 前掲『南方徴用作家——戦争と文学』、六頁を参考。
- 49 前掲『南方徴用作家——戦争と文学』（七頁）によると、文学者の強制徴用は一九四四年までに全部で三回行った。
- 50 「戦争と作家」『文藝』（第11巻）、一九四三年一月、一二六頁。
- 51 前掲「アジア・太平洋戦争期の情報統制・宣伝政策情報局のラジオ・プロパガンダ戦略と日本放送協会」、八六頁。
- 52 前掲『南方徴用作家——戦争と文学』、九〇・二二頁。
- 53 阿部知二『阿部知二全集』（第12巻）河出書房新社、一九七四年、二六七頁。
- 54 竹松前掲著書『阿部知二論——（主知）の光芒』（一九八頁）では、徴用令書が自宅に届いたのは「11月15日」であることに對して、前掲『南方徴用作家・戦争と文学』（二六五頁）では、徴用令書が届いたのは「11月10日前後」である。
- 55 ルーデンドルフはドイツの軍人であり、総力戦体制確立を推進し、政治にも積極的に介入して宰相ベートマン・ホルウエークを失脚させるなど、ルーデンドルフ独裁とよばれる強力な指導を發動した。彼の総力戦論および第一次世界大戦時の戦争体制は、戦前の日本にも紹介され、軍部などに少なからぬ影響を与えている。
- 56 前掲「十年」、一三七頁。
- 57 前掲『阿部知二論——（主知）の光芒』、一九九頁。
- 58 前掲『南方徴用作家——戦争と文学』、一六五頁。
- 59 内容は前掲『抒情と行動……昭和の作家 阿部知二』四三頁によるが、句読点がないために「阿部知二氏より夫人あて」「従軍作家の戦線だより」（掲載時期不明、一三〇頁）を参考して句読点をつけた。
- 60 前掲『抒情と行動……昭和の作家 阿部知二』、四六頁を参考。
- 61 阿部知二『火の島』『南方徴用作家⑤ジャワ編阿部知二（一）』龍溪書舎、一九九六年、十九頁
- 62 同上、十九頁。
- 63 「ジャワ文化覚書」（『国際文化』（第25号）、一九四三年五月、四三・四五頁）と、木村一信「阿部知二 インドネシアへの旅——ヒューマニズムと逸楽と——」（『作家のアジア体験——近代日本文学の陰面』世界思想社、一九九二年、一七一頁）を参考。
- 64 前掲『南方徴用作家⑤ジャワ篇阿部知二（一）』、一六五頁。
- 65 前掲「阿部知二インドネシアへの旅——ヒューマニズムと逸楽と」、一七一頁。
- 66 電波対談について、一九四二年八月二日の中国語誌『申報』（第二四五七八号、二頁）によれば、「日本放送協会は二十日の午後九時に、新しい試みとしてバタビアとの間に六千キロの距離を超えての対談放送を行った。東京方面の出席者は菊池寛、堀内敬三、高田保の三氏、バタビア方面は日本軍宣伝班の阿部知二、飯田俊夫（原文ママ、正確的には「飯田信夫」）、松井翠声の三氏である。この対談内容は全国各地に生中継された」（拙訳）とある。
- 67 阿部知二『年譜』『現代日本文学全集44（阿部知二集伊藤整集中山義秀集）』、筑摩書店、一九五五年、四一九頁。
- 68 一九四二年八月十五日に、スカブミの山荘にいた阿部は、妻澄子宛の手

紙で次のように述べている。「11日に仕事片付き北原君とここに来た。17日にはパタビアへ、20日内地向け放送で菊池氏と対談。ジャバの学会と科学者のためいささか尽くした」とある。文末の「ジャバの学会と科学者のためいささか尽くした」(『阿部知二文庫目録 阿部知二遺族寄贈・寄託資料』、姫路文学館、一九九五年、一五三頁。)というのは、オランダ学者の救助を指していると考えられる。そのため、二人が西部ジャワのスカプミの山荘へ療養に向かう前に、既に捕虜収容所に囚われたオランダ学者たちの保護と釈放に取り組み始めた可能性が高い。

69 町田敬二『戦う文化部隊』原書房、一九六七年、一七四～一七五頁。

70 寒川光太郎『従軍風土記』興亜日本社、一九四三年、七九頁。

71 全貌社全貌編集部「阿部知二…戦争謳歌で浮かれ狂う便乗作家」『進歩的文化人』全貌社、一九五七年、九七頁。

72 木村一信「阿部知二の徴用体験：『死の花』の背景」『昭和文学研究』(25)、一九九二年、一五六頁。

【付記】本論文は、九州大学大学院未来共創リーダー育成プログラム(GIPAD)と中国国家留学基金管理委员会(202208050080)の助成によるものです。

(九州大学地球社会統合科学府博士後期課程二年)